



Title	ありし日の師を偲んで
Author(s)	松本, 大
Citation	語文. 2020, 115, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88507">https://doi.org/10.18910/88507</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ありし日の師を偲んで

松 本 大

恩師・加藤洋介先生の急逝に際し、今でも信じられず、何かの悪い冗談なのではないか、と疑う日々である。足を空にて惑うて

いるが、ここに拙い文章を捧げ、師を悼みたいと思う。加藤先生のご業績の偉しさは私どきが述べるまでもないため、先生との研究に関する思い出を綴ることによって、師への心よりの哀惜の意を表すことにする。

加藤先生は、滅多に学生をお褒めにならなかつた。そういうふた基本方針があるのではないかと、よく研究室で話題にしていたことが懐かしい。ゼミの演習や古代中世の発表では、度々、

「無理でしよう。」

と、考究の甘さをご指摘なさつていた。加藤先生の教えをうけた者であれば、必ず一回はこの言葉をかけられた経験があるのでないか。一見すると赦無いこの言葉は、その後に繰り出される先生の起死回生案を聞くと、全くその通りであると素直に受け入れられるのであつた。先生のご指導は、既存の手法や視点を大胆

に見直し、常に斬新な研究を目指す、という姿勢が一貫していた。

時に魔術的とでもいうべき代物であつた。

博士後期課程四年のある時、論文執筆に際し、『河海抄』のある注記群をどのように位置付けるか悩んでいたところ、

「そうだねえ、現存本の成立年代が下がる、とか？」

とのご助言をいただいた。気付かないうちに先行研究を信じ込み、その枠に囚われていた私は、自分の視野の狭さを恥じるとともに、先生が既存研究に恐れも無く挑戦し、乗り越えていく姿を見、憧れを強くしたのであつた。バツトで殴られたようなあの一瞬の衝撃は、私は決して忘れるはないであろう。

ことあるごとに研究指導をお願いしたが、いつでも部屋に一人でいらっしゃつた先生にとっては、手のかかる学生であつたと思う。考証や結論が悪かつた時は、困ったような顔をなされて、口数も少なく叱つていただいた。つまらなさそうに、

「まあ、いいんぢやない。」

とおっしゃつていただいた時は、そんなことは一度ぐらいしかなかったが、劣等生のこの私はかえつて不安になつてしまつた。振り返ると、海の物とも山の物ともつかない学生であつた私を、よく指導してくださつたと、本当に感謝しかない。まぎりなりにも研究者になれたのは、先生あつてのことである。

加藤先生との思い出で、最も印象に残つているのは、『河海抄』の諸本調査に明け暮れていた時分に、

「君は、炭鉱夫だねえ。僕は、鍊金術師の方がいいよ。」

とおっしゃつたことである（先生のご名譽にかけて、職業差別を意図した発言ではないことを、申し添えておきたい）。言うまでもなく、炭鉱夫＝松本、鍊金術師＝瓦井、の構図である。各地の所蔵先に調査に趣き、成果が出るかどうかからないまま、地道に異同を取つてくる私を評したが発言であつた。かけた労力の割に得られる成果が少ないと、そして全く華が無い研究であることを、端的にご指摘なさつたのであつた。言い換えるならば、もつと目立つような研究をしなければ、いつまで経つても世間に認められない（戦略的に就職のことを考えた方がいい）、というごとをご指導いただいたのである。

「炭鉱に潜れば、潜つただけ成果が出るのでよ。」

と全く意に介していない私の返答に、先生は、呆れつつもある種お認めいただいたような、何とも言い難いお顔をなさつていた。その深意はよく分からなかつたが、このご発言は、先生なりに、私を気遣つていただいた言葉だつたのではないか、と思う。文献調

査・諸本調査の過酷さや、評価されるまでに時間がかかることを、身を以てご認識の先生だからこそ、このようなご助言になつたのだ。もつとも、先生はそのようなおつもりは無かつたかも知れないし、過去の先生のご発言等からは、むしろ全く無い可能性の方が高いのだが、私はそう信じたい。その後も何度かこの喻えをおっしゃることがあつたが、先生からいただいた「炭鉱夫」という称号は、私にとっては自分自身の研究手法を卑下する言葉ではなく、誇らしいものとなつて胸に残つてゐる。

過去を振り返り、今を思えば、炭鉱夫も鍊金術師も立派に研究者として仕立て上げた先生は、星野仙一や落合博満のような、稀代の名選手であり、稀代の名監督であつた。

私は、特段優れた学生・研究者ではなかつたし、加藤先生もそのようにご覧になつてゐた。ただただ愚直にやつてきただけである。その愚直さは、加藤先生が背中を押して下さつた賜であり、先生の教え子として守り伝えるべきものと考へてゐる。鍊金術師の方は妻に任せるとして、私の方は先生の学統を、「炭鉱夫」として受け継いでいきたい。勝手に弟子と思つてゐるが、これからもそういう思い続けるために、私なりに地道に精進していくことを、決意を新たにしている。先生がご無念のうちに残されたお仕事についても、私では不十分であろうが、なんとか世に出せるよう尽力したい。それが、先生に対する僅かばかりの恩返しと考へてゐる。

先生には、生前、十分に御礼も申し上げることが出来ず、ご学恩に報いることも出来なかつた。炭鉱夫的な研究手法を、先生は

あまり褒めてはくだらないだろうし、このふざけた文章についてもお叱りになろう。まだまだお教えいただきたいことや、ご見解を伺いたいこと、ご相談に乗っていただきたいことがあった。いつの日か、またご指導いただける時に、少しはお認めいただけるよう、研鑽を積みたいと思う。

加藤洋介先生、本当にありがとうございます。

(まつもと・おおき 奈良大学講師)